
ゴッドイーター

月下の契り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴッドイーター

【コード】
N52100

【作者名】
月下の契り

【あらすじ】
最強のゴッドイーターが現る。

「最強のゴッドイーター」

神機使い　ゴッドイーターと呼ばれる者たちが集う支部、通称アナグラに俺は派遣された。以前いた支部で隊長していた経験を買われたとのこと。だが俺自身はその理由に納得はしていない。今から訪れる極東も激戦区だが、俺がいた中東はそれ以上に激戦区だった。アラガミの最弱にあたるオウガテイルやサイゴート等は存在しない。皆、強力なアラガミに捕食されてしまったのだ。いるのは墮天種のコンゴウやヴァジュラといった巨大系。その激戦区の中、俺は単独で禁忌種に指定され、戦うことを禁止されていたアラガミと日々、死闘を繰り返していた。単独で戦う理由はただ一つ、俺しか禁忌種に対抗できないからだ。その為、毎日ぼろぼろの帰還だった。そのことを思い出すと極東に飛ばされたのは幸運か。

アナグラに着き、支部長と出会い仲間となる神機メンバーを紹介するとツバキという女性に連れられた。エレベータに乗り、俺は奥の壁に背を預ける。ヒバリは階ボタンの前だ。

沈黙が続く中、ツバキが口を開いた。

「中東からわざわざご苦労だったな。移動、疲れただろう？」

「アラガミを退治するよりは何倍もましです。それに長旅も悪くはありません。自然が崩壊しているのは残念でしたけど」

「そうか。……………着いたぞ」

エレベーターの扉が開き、ツバキの背を追うように降りた。

「全員、集まっているな。今日から新しく仲間となる近藤 零だ」

「中東支部から派遣された近藤 零だ。微力ながら頑張らせていただきます」

あらかじめ決められた台詞を機械的に俺は自己紹介した。その感情を感じられない自己紹介に不満顔を見せるニット帽の男とミニスカの女性。年齢は俺より二つ下ぐらいか。その二人の背後にはフードを深々とかぶった男性と白肌の足をスラリと見せている女性がいた。

「謙遜するな。お前が来てくれて俺は断然、楽できるってことだからな」

「リンドウ！ お前、極東にいたのか」

雨宮リンドウ 俺と一緒にゴツドイーターになった同僚だ。数年の経験を積んで俺は中東に、リンドウは不明だった。

「久しぶりだな。元気になっていたか？」

「……お前が当たりだったということか。俺は完全な貧乏くじだったさ」

「中東だったからな。本当によく生きてたよ」

「それはお互い様だろ」

完全に二人の会話になっていたのをツバキが咳払いをして場を沈め

た。そのあと、それぞれの名前を聞いて、話は本題に入った。

「いきなりだが、零には新人の二人を連れて任務に出てもらいたい」

「新人？ この前にいる二人か？」

「そうだ」

「了解した。任務はどこで受託したらいい？」

「任務の受託は既に済ましてある。その入口から討伐に出てくれ」

「わかりました」

俺はアリサとコウタを引き連れて任務へと出た。

荒れ果てた寺院の町。白い雪が地に積もっている。今回の任務はサイゴードの討伐。正直、目を瞑っていても倒せる。

「さて、サイゴートなら二人だけで倒せるな」

「馬鹿にしないでください。私ひとりでも十分です！」

アリサは短気のように。勝手にサイゴートを探すために突出していった。

「おいアリサ！ 追わなくていいのかよ？」

「あそこまで言い切ったんだから、大丈夫なんじゃない？ 心配ならコウタが追いかけたら」

コウタは舌打ちを打ってからアリサの後を追った。その姿は女の尻を追いかけているみたいだ。心配してはいないとはいえ、隊長を任せられた以上は同行しないとイケないか。

新型神機特有の変化可能能力を巧みに使ってサイゴートにアリサは奮戦していた。コウタも途中から合流して援護している。俺は寺院の上からその光景を見ていた。悪くない。特にアリサはいい動きだ。ぎこちないコウタをカバーしている。後は戦場の経験では一流のゴッドイーターになれるだろう。どうやら本当に俺の力はいらな

……

「というわけにはいかないか。……しっかりと調査しているのか？」

サイゴート以外にアラガミの気配が二つ。一つはコンゴウ。もう一つは………消えたか。どうやらコンゴウが捕食したみたいだな。さて、俺としてはコンゴウ相手にどこまで奮戦できるか確認したい所だが、疲労をうかがえる二人には無理か。死なすわけにもいかないし。

「ご苦労様。なかなか筋のいい戦いだっただぞ」

「零さんは高見の見物ですか？」

「最初はそのつもりだったけど、どうやらそうもいかなかったからね」

アリサは首をかしげた。意外とかわいらしい反応を見せるじゃないか。

「コンゴウが紛れ込んで」

コンゴウの叫び声が響き、姿を現した。

「コンゴウー！」

「経験は？」

「ありません。逃げましょう！」

「なら見せあげるよ、俺の力を」

「えっ？」

俺の神機、神咎を手に持ち、コンゴウと相對する。コンゴウは威嚇するように腕を伸ばしてきた。それが命取り。俺はその腕を一太刀で切断した。苦しむコンゴウに追い打ちをかけ、前方にかけて右足を切断する。そのバックステップ。剣から銃に変えて尾に連射する。光の輪が尾を囲み縛りつけダメージを与えていく。俺だけが持つオリジナルのバレットだ。

「おいおい、極東のコンゴウはこの程度かよ。これだとリンドウの奴も腕がなまってるんじゃないか？」

独り言をつ呟きながらとどめの一太刀を首に振り下ろした。コンゴウは絶命。

「す、凄い！」

「見直したかい？ 大丈夫、アリサもこの程度の動きはすぐにできるだけの素質はあるからさ」

アリスの頭を軽く叩いて、任務を終了した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210o/>

ゴッドイーター

2010年10月26日05時52分発行